

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ラスト・ザク 暗礁空域の暴霊 機動戦士ガンダム サイドストーリー

【作者名】

Legna1113

【あらすじ】

宇宙世紀0080 後に一年戦争と呼ばれる戦いは終結した。

タカ派が戦場に出ている間に穏健派が結んだ終戦協定は、それを良しとしない残党軍のゲリラ化を招き、戦後処理として軍事施設や本国には連邦軍が駐留する、日常が取り戻されるには、まだ時間の必要な時代。

ジオン軍のMS製造拠点である、月のグラナダにも戦後処理として連邦軍の技術士官が視察に訪れる。研究所に勤める一人の若きエンジニアから見た戦後の戦争、そして歴史の闇に葬られたある機体につながる物語。

第一話 停戦協定

その日、俺はいつも通りに出勤して新型機の 開発に勤しんでいた。

だが、休憩所のモニターから流れたその重大 ニュースは拘りのブレンドしたコーヒーの味 を忘れさせるほど強烈だった。

『今、私達は歴史的瞬間に立ち会っています。本日、宇宙世紀0079 12月31日、この グラナダで連邦政府とジオン共和国の間に 終 戦協定が結ばれました。∴戦争は終わったのです！』

興奮気味に話すキャスター。ここは軍事施設 として重要な拠点だけに、軍の高官が度々来 ている。政府の公式発表とは違う、戦争の実情に関する情報も断片的に入ってきていた。口にする者は少なかったが、皆この結果をどこかでは感じてはいた。考えないようにはし っていたが。

いざ、現実となるとなかなか衝撃的だ。周りもざわついてい る。当然だ、終戦したのはいいが、ジオンは負けたのだ。連邦軍が戦 後処理の為に乗り込んでくるのは明白、スタッフは拘束されて尋問だつてあるだろう。組織も解体か、転属。何より、この新型が接 収されるのは面白くない。いっそ、こいつを退職金代わりに頂いて逃げ 出したいところだ。

『クーパー主任、至急、第三会議室まできて ください。中佐が呼びびです。』

「俺を中佐が？」

中佐というのは、ここによく出入りしている 技術士官だ。元々、ジオニックのテストパイロットだったらしいが、MS工学にもあがるく、中佐待遇で開発部に入った経歴の持ち主。エリオット・レム技術士官と呼ぶのが正式なのだろうが、敬意と親しみを込めて、俺たちは「中佐」と呼んでいる。

俺は会議室へと急いで向かいながら、何故呼ばれたのか考えた。実際、まともに話したこともない中佐に名指しで呼ばれる理由など全く思い当たらない。

部屋の前に付くと身嗜みと息を整え、ドアをノックする。

「ミハエル・クーパーです、お呼びでしょうか？」

「来たか。入りたまえ。」

ドアを開けて入ると、そこには中佐が一人で座っていた。

「急に呼び立ててすまないな、主任。」

中佐は一言そういって、黙ってこちらを見つめている。

「あの、中佐？」

その意図がわからない俺は困惑した表情で話しかけた。

「おお、すまないな。実は折り入って話が あったのだ。」

そういって、用件について話し出した。「三日後に連邦軍の技術士官達が視察にくる。組織は再編もしくは解体、君の扱っている新型機も接收されるのは間違いあるまい。」

「残念な事です。戦場での勇姿を見られないばかりか、敵にとられるとは。」

「こちらの表情を見ながら、何かを伺っている 様子の中佐に言葉を
選びながら話した。

「私もそう思う、最後の仕事と一緒に試験場 でその勇姿を見てみないかね？」

「今から、ですか？」

「そう、今からだ。奴らの来る前にここをた つ。」

中佐の急な申し入れに、困惑はしたものの 願ってもないチャンス
なので、行くことにした。

「是非、お願いします。」

俺は二つ返事で話をすすめた。

「そうか、予定は一週間ほどだ。旅の出来る 支度をしておいでくれ。」

なんだか気になる言い回しだったが、俺はそのまま部屋を後にした。
ここでの最後の仕事、やり遂げられるだけ光 栄だと思わなくては。

三時間後に出発とのことだったが、元々俺は あまり持ち物は持たない主義だし、大して問題はなかった。

第二話 特別任務

手早く準備を済ませ、シャトルの搭乗口に向かうと、既に中佐が待っていた。

「早かったな。」

どつやら、事前に用意を済ませていたらしい。早速とばかりに中佐は言った。

「手続きは全て済ませてある。詳しいことは中で話そう。乗ってくれ。」

促されるまま、シャトルへと乗った。

シャトルは、普段俺が社用で乗るものとは、内装からして違っていた。

「軍の高官を接待するのと、同じ仕様でな、無駄に豪華なんだよ。」

物珍しそうに見ていたのがわかったのか、中佐がシャトルについて説明してくれた。

「華美なものも過ぎるのはあまり好かないが、悪いことばかりでもない。」

中佐はそういって、手元のスイッチを押した。

すると、座席の後ろから壁が立ち上がり、簡易的な密室になった。

「例えば、機密性の高い話題を話すこの設備もそうだ。」

なるほどと言った顔で、壁を見渡ししていると、中佐は意を決したような真剣な眼差しで俺を見据えながら、話し始めた。

「これは、命令ではない。君の意志を聞きたい。」

前置きをすると、中佐は話を続けた。

「これから向かう試験場で、実はある事件がおきる。試作機の強奪に見せかけた、残党軍への譲渡だ。」

いまいち話が飲み込めないが、今聞いた話はかなりやばい内容なのはわかる。

聞いてよかったのか、この話。

「しかし、あれは実験機だからな。初見で扱うのは難しい。整備も勝手が違うしな。」

状況が飲み込めずにいる俺をよそに、中佐は話を続けた。

「そこで、君に彼らの同行を頼みたい。整備はもちろん、何度か調整で乗った記録を見たが、君はパイロットの適正もある。」

「ここまで言われて、ようやく状況を飲み込めた。

つまり、俺に残党軍の手伝いをしてこいという話だ。

まさかこんなアグレッシブな出向を命じられるとは。いや、命令じゃないらしいが。

「あのザクは、私の今までの研究成果なのだ。特別なんだよ。君もそうだろうっ?。」

「初めは私が行くつもりだった。だがそれでは目立ちすぎる。奴らも

奪還に部隊を編成するかもしれん。そこで、君だ。モビルスーツ一機と研究者が一名送られただけなら、対応もあまいだろう。」

「たった一機のモビルスーツに、歴史を変える力はない。それは私もわかってる。ただ、この機体の戦場で戦う勇姿が見たい、そう、これは私の我が儘だ。」

よく考えてみれば…いや、よく考えなくてもこれはかなり滅茶苦茶な話だ。

のはずなんだが、なんだろう。迷いのない人間の言葉とは、こんなに強いものなんだろうか？

俺は考えるよりも、先に心を刺激され、それを抑える事ができなかった。

「わかりました。俺も一研究者として、この機体を戦場に送り出したと思っていました。やってみます。」

こうして、俺の特別任務は始まった。